

学んで守る、旅で伝える

世界遺産アカデミー

# WHA MRA

メンバーズレポート



2008年 秋号  
第2号

WHA MRA

【第2号】2008年9月15日発行

お問い合わせ先：特定非営利活動法人世界遺産アカデミー 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 /V.S.サイードビル2F 兼コフ TEL.03-6212-5020 FAX.03-6212-5022 E-mail member@wha.or.jp

巻頭インタビュー

## なぜいま、世界遺産を学ぶのか 私たちが忘れてはならないその原点

服部英二氏 (ユネスコ事務局長官房 特別参与)

特集1 第32回 世界遺産委員会情報  
世界遺産を通して各国の協力と世界平和をめざす  
ユネスコの意思が明確に示された世界遺産委員会

ボロボドゥールの仏教寺院群 (インドネシア)  
写真提供：田村仁氏 (写真家/世界遺産・旅の雑学サロン講師)

AIU Presents

# 危機を脱した世界遺産

第6回「イエローストーン国立公園」

●アメリカ合衆国/アイオワ州、モンタナ州、ワイオミング州  
1978年登録 登録基準は vii viii ix x

### 【絡み合う思惑】

世界遺産イエローストーン国立公園「世界で一番大切な国立公園」、「世界で一番間欠泉が多い国立公園」、「北米一野生動物が多い国立公園」、「世界で自然保護の誕生した場所」、「現在世界中が使っている野生動物管理テクノロジーの始まった場所」…しかし10年の長きにわたり、世界遺産危機管理リストに名前が載っていたのはなぜだろうか？

大きな要因のひとつは、イエローストーン国立公園が周囲を州立公園、国有林、野生動物保護地域などに囲まれ、公園の境界線には私有地があるなど、いくつもの管理局が存在し、それぞれの管理者がそれぞれの立場から権利を主張する、喧嘩の絶えない状態であったことだ。そうした歴史を背景に、8万平方キロに及ぶイエローストーン生態系に関わる25局以上の管理局を統括する管理協会が誕生し、統一した管理方針がとられるようになって今年で44年になる。イエローストーン国立公園の管理はこの管理協会の誕生で大きく前進し、今ではずいぶん健康な姿を取り戻し始めている。しかしクリントン政権時代中止となり、危機管理リストに名を連ねるといった汚名返上を果たすきっかけともなった近隣の油田掘削は、国の大きな利益となるため、次第に規制のたがが緩み始めている。危機管理リストからの除名は早すぎる判断だったのか？ その是非の行方は賢明な大統領の判断に拠っている。しかし、これは次期大統領選挙の結果を待つほかないようだ。(オバマになるか、マケインになるか…これでイエローストーン国立公園の将来も大きく変わる!!) また、イエローストーン国立公園周辺の宅地開発も国立公園生態系にとって大きな問題のひとつである。このような宅地開発地域はイエローストーン国立公園生態系に生息する野生動物の、いわばブラックホールのようなものだ。つまり、一度入り込んだら最後、でてこられない野生動物の墓場ということである。



パーク内の間欠泉  
(写真/イエローストーン国立公園)

### 【外来種の脅威】

さらにもうひとつ、イエローストーン国立公園にとっての大きな脅威は、様々な外来種がもたらす病気の蔓延である。たとえば、

ヨーロッパからやってきた外来種の病気は、いまや園内のホワイトバークパインのほとんどを枯死させている。魚の神経系を犯し、魚がクルクルと回転して泳ぐことからその名前がついたワーリング (回転) 病という病気は、釣り人の道具とともにヨーロッパからもたらされ、在来種のノドキリマスの数を絶滅に追いやっている。また、ニュージーランドからもたらされたカタツムリは1円玉の周りに10個



生態系の頂点にいるオオカミ  
(写真/イエローストーン国立公園)

体程度並ぶほどのサイズでしかないが、その繁殖力と適応能力から、驚異的なスピードで周囲の川に勢力を拡大している。これらを在来種の魚が食べて広がる食物連鎖の影響は計り知れない。

かつて生態系の頂点であるオオカミを絶滅に追いやったため、エルクの頭数が増えすぎ、食草となる植物が不足するなど、イエローストーン国立公園生態系は崩れかけていた。カナダからのオオカミ導入から10年、今では捕食者と被捕食者との正常な関係が回復し、健全な姿を取り戻している。たくさんのオオカミの子供たちが巣穴から出て遊ぶ姿、グリズリーやブラックベアが草を食む姿…それらを見ることを目的に世界中からやってくる多くの観光客。これが現在のイエローストーン国立公園の光景である。しかし、125年ぶりにやっと今では普通になったこの光景も、イエローストーンに迫りくる様々な脅威に、いったいどう立ち向かうかによって変わる。今年は去年に比べ374%の降雪量だ。砂漠化が進む公園北口も今年は一服、緑の食草を取り戻している。湖の水は満ち、飛来するペリカンの数も例年以上だ。久々のこのよいニュースが、今後の公園の明るい未来の第一歩であることを期待したい。

### 執筆者プロフィール

**万由 ブラウン**  
都市公園にて長年勤務、動植物や住民参加の小冊子等作成、講師としても活躍。現在イエローストーン生態系のインタープリテーションを行う傍ら、植物についての冊子を執筆中。

**スティーブ ブラウン**  
大自然教育専門家。1960年生まれ。モンタナ州立大学でイエローストーン生態学や日本史を教えた。1991年、大自然教育会イエローストーングレイシャーアドベンチャーを設立。2004年～08年、文部科学省スーパーサイエンス指定高校の研修で生きたイエローストーン生態系について教えている。日本からのインターンシップを設け、自然保護教育を学ぶ機会も提供している。

<http://www.national-park-tours.com/jstart.html>



**AIU保険会社**  
エイアイユー インシュアランス カンパニー  
A Member of American International Group, Inc. AIG

〒100-8234 東京都千代田区丸の内1-1-3  
旅行保険カスタマー・センター  
03-5611-0799  
[www.aiu.co.jp/travel](http://www.aiu.co.jp/travel)

AIU保険会社は、  
世界遺産アカデミーの活動を  
応援しています。



この印刷物は大豆油インキを使用しています